

江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0211 NO91

校長 伊波喜一

応援の 声は出さねど 周りから 見つめる姿 嬉しかるかな

今年度、最後の学校公開が終わった。生活科の交流遊びや理科の実験、保健の感染症予防の授業など、それぞれに見どころがあった。

参観というと、筆者にとって忘れられない授業がある。極度の照れ屋で、授業中一言も発しないYという子がいた。普段は発言の機会がYにめぐってくると、Yはスルーするか回りの子が答えていた。たまたまその日は、国語の物語文を取り上げていて、人物の気持ちを発表する授業だった。事前にノートに人物の気持ちを書いておき、当日にそれを読む。その内に、読み手の順番がYに回ってきた。案の定、Yはノートを手にしたまま口を固く結んでいる。実際には短い時間だったのかも知れないが、筆者には長く感じられた。その時Yが、自ら感想を読み上げた。初めて聞くその声は透明感があり、弾むようだった。一瞬おいて、大きな拍手が起こった。その拍手は、しばし鳴り止まなかった。Yの頬が紅潮し、耳たぶまで赤くなるのが分かった。 人の変わるきっかけは、つくづく分からない。Yの背中を温かく後押しした無数の声なき声に、今も感謝が尽きない。